

## 強者となる道(2)

### 大願

強く生きたい。真に強く生きたい。それは我らの心からの願いであります。私は前において、「我」をすてよ、たった一つの価値観をもとと申しました。

我らは生きており動いております。熱い血と、何事かをなさねばならぬ意志を持つています。したがって何事かを成すところに人生はあります。ただそのなすところが、統一されることを考え、まとまった一つの目標をもって動いているかどうか問題であります。まとまった一つの願いを追うて努力するところにほんとの人生があります。

強く生きた人たちは皆、大願をもった人たちでありました。

生きる事に何の願いもなくなくなった時、その生活は灰色であり死そのものであります。ですから、われわれは強く生きる前に、各自が各自の世界において、真の願いを見出さねばなりません。

ほんとの願い……ほんとうの願い……そこにほんとうの人生はあります。

ほんとうの魂の願求が何であるか、それが知れた時、強くなれます。

一つの志願が生まれる。それを成就しようとする時、きつとその前に何ものかの難関があらわれる。

難関また難関、昨日もそれをきり開き、今日もまたそれと戦う。

右に行かれねば、左に行く。上にのびられねば横にのびる。

こうした努力の世界だけに真の愉快があり、生きた人生がある。

力がそこに養われ、人格がそこに鍛えられてゆく。

願いがある。それを妨げるものができる。

そこで悲観する。願いを捨てる。灰色な自暴自棄が見舞う。これが弱い者の行く道ゆきである。

難関よ、いくらでも来い。私は笑ってそれにむかう。泣いたり怒ったりすれば、

私はその難関にまける。

「念願は人格を決定す。継続は力なり。」

これが、私を動かし、私を生かした、たった一句である。

私は他の何ものによつても、その人格を定めぬ。私はただその人の念願をきく。

彼の今日を動かしつつあるところの念願を聞く。それだけ聞いたら、あとは何を聞かなくてもいい。

富と名誉と権勢とを得んとする念願、それに動いている者は野心家である。

人間は先天的に一種の野心家である。野心のために抱く念願は、決して其の念願ではない。

そこで念願は純化せられなくてはなりません。念願が務められ、清められてゆくことが人格の光を増してゆくことであり、人間の道でもあります。

利己的な、自分本意の願いは、たとえそれがどれだけ大きくても、結局は、多くの人を利用して征服するのであり、野心を満足するのであつて、決して万人の生活をうるおすことはできません。

真実の願いは、決して野心の中からは生まれません。真実の願いは、其実の心の中からは生まれる。

万人の胸底にひそむ願いをわが願いとして立ち、万人の前にこの願いを示して自覚を与えます。

聖者は大きな事業を成しとげた野心家ではなかつた。その一代はもの哀れな不幸の中に消えて行つたかも知れない。しかしその胸に燃えた願求は至純であり至高であつた。

宗教、芸術、道徳、それらはただ高く清く、澄みきつた胸底からのみ生まれる。

願いが不純であればあるだけ、その願いを果たすための手段もまた不純であります。きたない動機ときたない手段でなされたことは決して美しいことではありません。

手段はどうでもいい、方法はどうでもいい、自分の立場さえ守つて、名誉をおとすまい、地位にありつこう、金にありつこう、そうした生き方が日本中の識者の頭を支配しているのではあるまいか。

新聞紙上にあらわれる政治家たちの暗躍や、策略や勢力争いが国民精神に何を与えるか。その地位を利用して、不正な金を得んとして失敗した疑獄事件はいつたい何を語るのか。

日本の国を、真実のみが輝き、真実のみが力強くなり得る、新しい自由の国に高めたい。真実を圧迫するいやな習慣や組織はどんどん改めてゆかねはなりません。

「大願を持って」そう叫ばざるをえませぬ。大願成就の確信ある者は、一糸乱れぬ堂々たる足どりで進みます。

信念とは大願成就の上へのみ見いだせます。大願をはらまぬ信、信念のない大願、それはどちらも真実のものではありません。

大願を持つ者は戦います。信念の力は何ものとも戦つて勝つてゆきます。

戦いは内と外とにむけられます。

横着な考えや怠ける心、人をねたむ心や高慢心など、我らの心中に巣くう悪魔と戦います。

我らの外からは、さまざまな誘惑や、悪罵(あくば)迫害が起こります。いかなる誘惑にも動かされず、どんな迫害をも忍び、どんな攻撃にもおそれず、真一文字に進みます。

強いとは決して人を傷つけ、策略を弄する者に使われる文字ではありません。真実を求め、真実をにらみ、真実を行ない、真実に味方し、真実をつたえるために……一口に言えば真実を生かすためにどんな苦しみをもさけない、時には命すらなげ出してゆくことであります。

そうしてそれは大願の持主であり、信念の人でなくてはできないことでもあります。大石内蔵之助の胸中には忠義の二字よりほかにありません。忠義の二字は彼の全身の血であります。主君の無念が大石の胸の無念であり、主君の仇が大石の仇であります。主君のかたきをうつまでは、彼は死んでも死なれません。笑えば笑え、それもよし、そしらばもしれ、それもよし、難関また難関、一寸のすぎがあつても敵の間者(かんじゃ)にさとられる。一口の言葉のうちにも、一挙手一投足の中にも、彼がかたきうちを忘れない。この大願の前には、村上喜剣が足の指の先にかけてさし出す魚の刺身も笑って食った。大願のはつきりした彼は、その大願そのものに動かされる。

今の世に豊太閤(ほうたいこう)たらんとするものがあれば彼は狂人であります。今の世にはナポレオンもいらねば、シーザーにも用事はない。

昭和の時代は、不統一きわまる社会状態や極端に平等の失われた徳川時代でも戦国時代でもない。その所に一世を権力で動かす英雄偉人はいない。

田園の中にも、市街の中にも、工場にも、海辺にも、もつと健実な努方と、高き人格とを有する有用な人が必要であります。

「社会」それは近代人が見いだした新しい一つの言葉である。若人たちは個人修養改造よりも、社会の組織の改造をとげよと叫ぶ。それはある意味で正しいことでもあります。しかし社会は決して人をおいてはありえない。社会を高めるとは社会を作る人の全体を高めることでなくてはならない。無知なる人と、欲深い人と、悪なる人とが集まるところ、そこには決してよりよき社会は生まれてはこない。自覚せよ！目をさませ、社会人として全き人であるか。社会悪をささえる根源が汝(なんじ)の上に巣くつてはいないかと考えざるをえませぬ。

願いをおいて人生はない。至誠の中に生まれる高い大願が汝を強い人にする。まことを地位よりも名誉よりも重んずる、ほんとの精神主義にかえれ。守銭奴の群よ、精神主義にかえれ。

表に精神主義をかぶりつつ裏面に唯物化しつつある政治家よ、ほんとの意味の精神主義にかえれ。

強者は常に崇高なる精神の持主であり、不動の意志の保持者である。

静かなる胸に

日光に遊ぶ。天気清澄。華嚴の滝、何たる壯観ぞ。直下幾十丈、白銀の如く、吹雪の如く、ま綿の如し。大自然の美に酔うこと幾分。この美の前に、東照宮の日暮門何らの価ぞ！ おお大自然の神秘よ。

汽車の窓にうつる紅葉黄葉 鈴なりになれる柿の色  
関東平野の地平線に横たわる雑木の林

松林の間に真紅に金色に落ちてゆく夕日の神々しさ  
沈黙の胸にひし／＼とせまる感激 我今生きてあり！

悲哀か歓喜か……厳粛なる大自然の相よ  
温かき大自然の血の動きよ 強烈なる大自然の威耐力よ  
汝は我を完全に領有しぬ。

丘の麓に野菊が咲きほこっている。

「あれきれいだこと！」走りよつて女たちが折りとつて手に持つ。今までのあの自然のままの美の配列はくずれる。

おゝ野におけ！ 自然のままに  
次第にしぼれてゆく花の相が、いたましようなる。

紅と黄の美しいダリアが机の上におう。

私を待つための美しい心、生きた人生がここにある。  
美しい花を飾つて人待つ心、我はその心に涙ぐむよ。

東京における歓迎会の席上 西岡法兄のバイオリンを聞く。

私は前からスーベニールをすく  
「タラララ ツララ………クララ ラツララ………」

我スーベニールを好む。これを聞く時、念仏する時の如く、久遠の我を見出した心地すらする。

大自然の清く崇く尊きなかに 人の世の何たる醜さぞ  
忽然として現実にさめる時、大地の上は永遠の暗なるか

混沌たる無明界に 生れては死に、死んでは生れる  
群萌のあえぎ

さめることなく、考えることなく、ただ争鬭をくりかへす  
現前の安逸を求めて、生死巖頭の舞踊に奮われ  
是非を語り、善悪を語りて、人を裁く、

如来は大慈悲をこの現実の上におこすという。  
あゝ生死海の無明よ。

活眼を開いて大地の真相をにらめ

雑多不統一な騒々しい音響と 強烈なる色彩の刺激 それらが我らの目と耳とを奪う。その昔に引かれ、その色にさそわれて、考えることもなく汝の足が運ばれる。

活眼を開け！ そしてじつとその背後をにらめ。

その眼、その耳を養うことが汝の真に生きる道の発見である。

その眼にのみその時代の底に横たわる病根が見える。

先覚者たちは、そこに叱咤し、そこに泣き、そこに覚め、そこに叫んだ。

親鸞聖人は、自己の胸底に万人の悩み、苦しみを苦しんで大地の涯に見出される救いを体験し、それを説いた。

「信」それは与えられた唯一最高の世界である。

一つ信に二つの世界が見える。

一つには無限の光りの広野と

一つには無限の暗の広野と

そを一つに統一するものが信であつた。信は心の限である。

行きづまって道がわからぬ。

泣くのをやめよ。じつと静かに合掌しよう。きつと見える。きつとわかる。

道は真似るのではない。借るのではない。

真の大道は汝自身にのみ暗示される。

ふらくするな、人の道を行くな。

人の口には責任はない。責任のない人の言葉に動いているからお前の道がわからぬのだ。

お前の道を歩むのはお前である。お前の道を知るのもお前である。

悲観するな、泣くな。その道はお前が静かになつた胸にさゝやかれる。

汝よ、汝は何故に汝の味方を殺すのか。

お前が敵だと思つて斃した男はお前の敵ではなかつたのだ。恩人なのだ。

お前はなぜ黙つているのか、あゝお前はここの男を生かしておいてはお前の勢力がそがれると思つたのだな。

何たる無智ぞ！ お前の胸底には恐しい悪魔が巣くつていて、その悪魔がこんな惨虐をさせているのだ。

何？ この男が世を乱す悪魔で、お前は正義の刃をとつたのだと？

お前はまださめないのか。

哲人ソクラテスに毒杯を持たせた者、キリストを十字架にかけた者、法然、親鸞を流した者……それらは皆、お前の通りに正義の刃だと叫んだ。皆悪魔の仕草だ。お前は今その力に強ひられて、暗い道を行つていることを知らないのだ。お前はそのお前の足下に、紅蓮の炎さかまく無間の大地獄の火口が口をあけていることを知らないのか。

見よ、お前のかげには滅亡の色が見える。お前の世界を滅亡につれてゆく悪魔のすがたが……お前はそれを知らないで、お前の世界を亡ぼし、お前の世界を狭くする者は、この斃された男だと思っている。

お前が血迷えば血迷うほど、お前のかげは笑っている。お前はそれを知らないのだ。

私は汝に教える。

その刃を内に向けよ。そうしてお前の胸中の悪魔にあてよ。

悪魔は化ける。さも味方らしく、お前を甘い言葉であざむく。

お前がその悪魔を斃した時、万人を抱く広い心が生れる。

その広い心の彼岸には、光明の世界がある。

汝のその広い心の中のみ、永遠の栄えがある。万人はその温いうらかな世界に憩うであろう。

見よ。斃された男の赤い血を次から／＼若い人たちが生命の水としていただいているのではないか。あの若人たちは皆輝かしく蘇えつてゆく。それらは皆、第二第三の彼となるのだ。お前がその我慢と嫉妬心を捨てない限り、お前の世界はずんずん狭められてゆく。

お前はまだ覚めないか。お前はまたも刃をとつて彼ら恩人を殺す気か……。

おゝ生命の火の消えた者の末路の悲哀よ！

静かに考える……………

考えない世界には、詩もなければ、宗教も、道徳もない……………

そうだ静かに考えない世界に深い人生はない。

「謹んで按ずるに……………」それが親鸞聖人の筆の書き出しであった。

偉大なる哲学も、偉大なる宗教も、この謹んで考える世界から生れた。

静かに冬の森林のような静けさ、その中に謹んで先覚者の教えを聞く時、我らの世界は高められる。

平凡なる我らの現実があまりに騒々しくはないか。

もつと静かに、もつと静かに 鉄瓶の湯の音が静かに聞える。

静かな夕が来た。

皆々湯にはいれ。体の緊張をゆるめて、心ゆくまで休むがよい。

白銀の月が東の山をはなれた。

静かな蓄音機の音が流れる。

ひたれ！ ひたれ！

この静かな夕こそ、働く汝に与えられた詩の世界である。

窓辺の机に書をひもとくがよい。

火鉢のぐるりにあつまつて、語りあふがよい。